

大地

浄国寺
No. 2

建設を了えて



建設委員長 風間 萬治

私は浄国寺さんの護持会々計を承っております風間でございませう。毎年護持会費につきましては格別の御配慮を賜りまして有難く存じております。今後共何卒よろしくお願い申し上げます。

さて今度当寺の本堂修理、庫裡改築に当りましては、檀家信徒の方々、県内外の皆様御懇篤な御寄進を忝うし、此処に工事恙なく建設を完了致しました事は、お寺を始め私共檀信徒一同此の上ない慶びとする所でございます。是偏へに皆様方の熱烈なる御信仰心と、限りない御支援の賜と深く感謝申し上げますと共に、本工事に当られました岡田工務店の終始変りない御誠意の結実と厚く御礼申し上げます。

げます次第でございます。昔から事の成るは、天の時、地の利、人の和と申されております。天の時と地の利は致し方ないと思はしても、人の和こそ大事なことと思われませう。

私の様な無学微力な者が、建設委員長の大役は到底尽せませんでしたが、幸い委員方の中には土木建設・金融経済のベテランがお揃いで、御助力を頂きましたこと何よりの倖でございました。頭初から慌しい発足で、何かと皆々様に御迷惑をお掛け致しましたこと深くお詫び申し上げます。お蔭様でお寺の御努力、委員方の御尽力、檀家方の御熱意ある御支援に依りまして、御寄進も予期以上に賜りここに目出度く竣工の式を挙げるに至りました。是こそ人の和の現れと、天の時を得たものと存ぜられます。何時も交りませぬお寺に寄せられる皆様方の並々ならぬお心が今回の結実となりましてが、又御任職のお徳の致すところと深く感ぜられます。

本堂、庫裡の完成と共に、御任職御丹精のお庭の木々も季節毎にそれぞれ美しい花を咲かせます。

何卒お寺を信仰の道場、憩いの場と致されまして、機会の折々にお出かけ頂きまして、御先祖様と御子孫方につながる御縁を深められますようお願い申し上げます。お暑き折柄、皆様には一層御自愛遊ばされますよう重ねて申し上げます。御支援真に有難うございました。七月三十一日

あした
旦の光の中

しのめ 山崎 隆昌
東雲の蒼墨の空へ鳥群れ翔ぶ
やがて、蒼墨の空は狭くかわり
溢れる旦の日光が一面に踊出す

杉の木の間より差し込む陽光は
石畳の参道に跳ね
真新しい庫裏の白い下見を
薄朱く化粧する
向拝に落ちた光は
開け放された本堂の中に飛込み
青い畳と戯むれる

新たな念仏の道場は
旦の日光の中に建ち
四方に門を開いて
聞法の同朋を迎へる

勿
体
な
や

山崎 武雄

○勿体なや祖師は紙子の九十年

有名な前法主句上人の句であります。宗祖親鸞聖人は九十年の長い御生涯、紙衣を着、粗食に甘んじ、定まった住居もなく、勿体ない御生活でしたが、信の一念にもえて説かれる教えは、民衆に深い感銘を救い。信心の喜びを与えて下さったのです。『本願を信じ、念仏申さば、仏になる』、その尊い教が今うけつがれ、寺院一万、信徒千万を超える一大教団となったのです。併し悲しいことに、長い間に伝統と称して、因襲のみ重ね数々の悪い面も出て参りました。それが今回の東本願寺問題です。封建的体質に加えて、宗祖の御法身をまもり、念仏の道場として御同朋御同行と共に、生き生きとした働きをせねばならぬ本願寺が、物質主義のとりことなつて仕舞っているのです。単なる生活寺院におちようとしています。全国一万の末寺寺院は、今こそ、浄土真宗

とはいかなる宗旨か、本願寺問題をわが身の問題として考え、歎異の念に涙せねばなりません。だがその事が、果して着々と実行されているでしょうか、残念ながら否です。なかなか封建、物質主義から抜けられないのです。一例ですが教団の組織維持の上で必要だと称する、寺格(寺の格式)堂班(僧のくらい)などあることです。それにより衣の色から五条、わけさ、平素着る間衣に至るまで区別され、公式の場合には並ぶ順もきめられます。そしてそれが一切、上納金の額によりきまるのですからおかしい話です。格別の由緒もないのに、由緒地、巡護地など称する寺ばかり続々出来、百人一首ばりに僧正、大僧都、僧都のくらいの方々が全国津々浦々に、数えきれない程居られ、しかも若い僧侶の方までそれを望んで居られます。大谷派は部落問題に真剣にとりくんでいるとか、同朋教団などと言っても、ナンセンスではありませんか。この事一つさえ解決せずして親鸞にかえれとか、本願寺の問題を自己の問題とせよ、など声を大にして、天につばする感じですね。

拙寺としては、今后も寺格堂班など絶体に、上げる意志はありません。葬式には色衣を着ますが(他の一緒にお出でになる僧侶方が色衣なので、手次が黒衣をつけるのも一寸おかしいので)法要は、黒衣五条にしますから、何とぞ御了解願います。

親鸞聖人、蓮如上人の御絵像は、皆黒衣、墨袈裟です。一面合理主義者でもあった蓮如様は黒衣さへ、変色のおそれがあるからと晩年、うすねずみ色の衣だけ着服されていたとの事です。

今新しく立派にして頂いた念仏の道場を中心として、求道一途、御同行の皆様ともども、具体的に朝夕の勤行、聞法精進、同朋会運動等をしつかりさせて頂くうではありませんか。

余談になりますが、金子大栄先生宅へ、何回かおろかがいして泊めて頂いた日の事を述べさせて頂きます。毎朝六時御内仏の勤行、午前中は、大学の講義に行かれないう時は、読書と原稿書き(毛筆で)午後には午睡とその後寄贈の書籍、新聞等を読まれ、よく訪問客とも会って談笑されました。併し五時

になると、いかなる時、いかなる人とお会いの時でも、中座して平服のまま、御内仏の戸を開いて、勤行なされ、家族の方、同席の者も一緒につとめました。九十五年の御生涯の中、あとの六十有余年、地方へ御出講の時以外、この生活ペースは殆んどくずれませんでした。この信の上に立った御生活が御健康と、あれだけの大きな御教化、御業績を残して下された所以かと、しみじみ感じました。又日頃から「自分は仏教を学ぶのではない。仏教に学ぶのだ」とおっしゃっていました。身を以て仏教に学ばれた先生は、所謂単なる仏教学者ではありませんでした。

鴨がかへって来た

山崎 睦

「鴨々」の声にふと目を覚して、座敷の縁側に出て見ると、鴨が三羽、首を一ぱいにのばして、私達を恐れる事もなくこちらへ向って歩いて来るのが目に入りました。二十年位前までは、古い庭の蓮池

に鴨が毎年訪れ、梅雨の頃になると、くひながひなを連れて、庭先に遊ぶ姿を見ることも珍しくありませんでした。けれども一面の青田が住宅地になり、舗装された道路には、車の音が絶える事が無い今は、もう鳥たちの憩いの場ではなくなっていました。

今雨上りの緑もすがすがしい木の下をお尻を振り振り、可愛いい目を左右に向けながらよちよち歩いて居る様子を見る時、自然が返って来た様な気がして、なんとも嬉しく平和という言葉が頭に浮かびました。どうかこれからも忘れないうで、時々遊びに来て欲しいと強く思いました。

今年も長年の夢でもあり、念願でもあった本堂の改修、庫裏の改築も、皆様の暖い心と御努力によって立派に出来て本当に有難く嬉うございます。

新しい家の縁先から庭を眺めながら若夫婦、孫達に囲まれておだやかな日々を過せる、自分を幸せ者だなどと、つくづく感じました。そして坊主として、至らぬ身を省み、皆様と共に精進して行きたいと思えます。

利休の燈籠

山崎 武雄

長男が大学在学中、京都の大徳寺町に、下宿していたので、そこを訪ねる度、すぐそばの大徳寺を始め、その塔頭を覗いて廻ったが一番よく行ったのは高桐院です。

この庭はもみぢの樹々を主にした掃き庭で、一見平凡ですが座敷の国宝牡丹の図を背に広縁から眺めていると何とも言われぬ風情あり、もみぢの枝、葉ぶり、美しい色にみせられます。樹々の下の谷も美しく、何の説明もないが、何時間いてもかまわぬので半日位居た事もあります。全く見あきません。風の吹く日に行った時、庭掃除の老人が、やわらかな独特のほうきで、散る葉の中で掃いて居られたが、その根気が、よく台を育て、庭の品位を保っているのかなあと感心しました。その庭から横にまがると、利休作の茶室あり。入り口近く苔むした燈籠が一本あり、もの寂びた茶室、まわりと調和して『よいなあ』と素人目にも感ぜられます。これも利休(四面へつづく)

休作と言われますが、作られた時既に火桶の下の石の角が欠けて落ちていたとの事でありませう。

わざと欠いたものか、石工が誤って落したもののか、自然に欠けたものか、ともかく欠けています。時の天下様、豊臣秀吉は、権力金力をたてに、何でもよいものがある、と聞けば召し上げられるので、利休の反骨精神が作った時、すぐわざと欠いてとり上げられるのを防いだとの伝説もあります。併し私はどうも石工が誤って欠いたものか、自然に欠けたものではないかと思えます。そして利休はいずれにせよ、こよなく満足して眺めていた事は確かではないでしょう。か。自然を尊ぶ茶の心。すべてを許す心、奥床しい茶人の心が伝って来ます。

いかなる人にも長所あり、短所あり、家の造作、調度品、庭の草木、大小色とりどりの葉や花の色を見る眼、眺める心によって変わります。簡単に評価するなどもっての外です。互尊独尊、人も自然もところを得て、生かされていることは有難いことではありませんか。

爪のない猫

山崎 慎子

わが家の猫は今年で十三才(推定)。名前をミーという。器量の良い三毛のメス猫である。今頃、ミーはいない筈だったのだけれど、なんとか命拾いをして今だに生き長らえている。というのには、家を建て替えたら保健所行きという、残酷な諒解が暗黙のうちになっていたのである。新しい家の柱や敷居を猫の鋭い爪で傷つけられてはたまらないという、それだけの理由で。ご近所には、そのかい猫のために建てたばかりの家中に、猫が爪をたてそうなところ全てにトタンをはりめぐらした心優しい人々もいるのに。

ところが、いざ新しい家に越してみると当然のことながら、誰も猫の首に鈴をつける役を引き受けないのである。まさか猫のたたりなど信じはしないけれど、第一子供達にどう言い訳するのだろう。小動物を飼い共に生活することを得る幾多の貴重な経験を、新しい家とひきかえに無しにしてしまおう。は、明らかに大人の勝手であろう。

そうした逡巡のあとに得た結論は、猫の爪を抜くという事であった。母にすれば、爪を抜いてしまったのはじきに死んでしまうのではないかと、という危惧を抱いたのだろうけれど。座敷の敷居に爪をたてた日の夕方、ミーは獣医の門をくぐった。先生の話では、年老いて爪を抜けば猫はたちまちノイローゼにおかされてしまうのだという。結局十日毎に爪を切るべしという指導をいただいて、千五百円のミー専用の爪切りを買い、人間も猫もめでたしめでたしで幕、という次第である。蛇足ながらその日ミーは獣医先生からお駄賃のキャットフード一缶なりを頂戴した。恐らく猫にとっては屈辱的であろう爪切りに対する先生の、深い愛情にちがいない。

今朝もミーは私が掃除するかたわらで、ゆるやかに伸びをする。敷居に爪をたてようととしてやがて気がつき、すぐすと去って行った。あるいは爪を切られた猫の、ささやかな抵抗であったのかも知れない。

